九州産業大学国際文化学部紀要　第8号 47-56（1997）

ドイツにおける生涯教育施設の史的変遷に関する研究（その2・完）——1970年代以降の夜間ギムナジウムのカリキュラム改革を中心に——

小　川　哲　哉

（1997年1月21日受理）

1．はじめに

拙論[1]において述べたように1970年代以降のドイツ[2]においては，他の先進諸国同様高等教育に大きな変容が起こる。それは，20%以上の進学率がもたらした大学の広範囲な大衆化現象である[3]。こうした変容に伴い，アビトゥーア取得がそのまま希望する大学への進学を意味することにはならなくなるのである。

このような状況に対処するため，代表的な中等教育施設であるギムナジウムの上級段階で一連の改革が行われたことはよく知られている[4]。そして，こうした改革の動きは，生涯教育施設にも大きな影響を与えることになった。

拙論同様に本稿においても，主に夜間ギムナジウムに焦点を当て，1970年代以降のカリキュラム改革についてまとめてみたい。まず最初に，一連のギムナジウム改革を概観しておこう。

2．「ボン協定」とギムナジウム改革

1972年7月7日の常設文部大臣会議において締結された協定（「中等第Ⅱ段階におけるギムナジウム上級段階の新編成に関する協定」），いわゆるボン協定によってギムナジウムはこれまでにない大きな改革を受けることになる。この様な改革の背景としてあげられるのは，1960年代後半から始まる大学進学率の急激な上昇と，入学者の学力，興味関心，動機付けの多様化である。これらの事実は，従来の学校教育制度の根本的な変革を求めるものであった。改革の主な点は以下のようにまとめられる[5]。

まず最初に，ギムナジウムの種別が廃止されたことである。これは，70年あまり続いた伝統あるギムナジウム種別制が廃止されたことを意味する。そもそも1900年以来，ギムナジウムは，一般のギムナジウムと実科ギムナジウムに種別化され，それによって生徒の進路は規定づけられていた。しかしこの協定によって生徒は，もはやギ

ムナジウムの種類よって進路が方向づけられることはなくなったのである。これにより生徒は，「個々人が科目の自由選択によりギムナジウムの内部で自由に種別を選び取れるシステムに移行」することになった。そして，この種別化に代わるものとして採用されたのが「基礎・重点コース」を基本とする複雑なコース・システムである。

授業単位としての「コース」の目的は，生徒の選択の幅を広げ，多様な科目を自由に選択させることにある。コースとは，週当たり何時間かで半年間（1ゼメスター）なされる授業単位のことであり，生徒はこのコースを自由に選ぶことになる。コースは，週当たり2～3時間の授業を行う「基礎コース」と，週当たり5～6時間の授業を行う「重点コース」に分かれており，両コースは2年間継続して履修することが求められている。基礎コースの場合，国語（ドイツ語），外国語，文学ないし芸術，数学，自然科学など22（そのうち2科目はアビトゥーアの科目）あまりのコースがある。また重点コースは2科目を選ぶことになっているがそのうち1科目は，外国語，数学，自然科学でなければならない。生徒は，これらのコースを自己の興味関心にもとづいて自由に選ぶため，従来の意味におけるクラスは解体することになり，担任教師が存在しなくなったのである。その代わりチューター制度が導入されることになった。このようなボン協定に基づくギムナジウム改革の実現を，各州はその後10年以上にもわたり――「改革多幸症」の時代とも揶揄されたが――論議することなる。

こうした一般のギムナジウム改革を夜間ギムナジウムに導入することに関しては，当初よりその困難さが指摘されていたと言われている(6)。主な理由は，時間的な制約である。夜間ギムナジウムの場合，生徒の多くがフルタイムで働いている社会人のため授業開始を17時30分以前に行うことができないのである。そのため一日5コマ以上授業を行うことはできない。例えば，一般のギムナジウムで行われている半期2年間の20の基礎コースも，夜間ギムナジウムでは16の基礎コースを確保できるにすぎなかったのである。

この種の問題があったにもかかわらず，1979年6月21日，常設文部大臣会議よって「夜間ギムナジウムの再編成に関する協定」が締結され，ギムナジウム上級段階の改革制度を夜間ギムナジウムに導入することが決められたのは以下のような理由があった。一つには，夜間ギムナジウムのカリキュラムが一般のギムナジウムと対応可能であったこと。さらには，ノルトライン・ヴェストファーレン州など夜間ギムナジウムの先進州においてすでに先行的に，コース制のカリキュラムには欠かせない「選択科目」制を導入した授業実践が行われていたことがあげられる(7)。

3. 夜間ギムナジウムのカリキュラム改革

ギムナジウムの改革が始まってから10年後の1982／83年の学期から多くの諸州の夜間ギムナジウムにコース制が導入されたが，その形態は一般のギムナジウムとは多少異なっていた。

夜間ギムナジウムでは，２年間の「コース段階」（いわゆる基礎・重点コース）にはいる前の１年間は，「入門段階」と呼ばれる「準備コース」（１ゼメスターあるいは２ゼメスター）を履修することになっている(8)。これは，主に専門科目に進学する前の基礎知識を学ぶためのコースであるが，同時に入学者の多様性に配慮したものでもある。というのも夜間ギムナジウムの場合，入学者の経歴が他の教育施設と違って極めて多種多様であるからである。夜間ギムナジウムでは，基本的に３年以上の職務経験（州によっては１年半）が入学資格となっているが，実際には10年以上の職務経験を持っている生徒も珍しくない。そのため生徒間の諸能力には大きな違いがある。準備コースは，これら生徒間の格差を平準化することを目的としているのである。規定上「中等教育修了証（mittlere Reife)」を取得している入学者は，この準備コースを１ゼメスターだけ履修すれば，コース段階へ進むことができるのだが，あえて２ゼメスター履修する者も少なくないという。

改定された夜間ギムナジウム協定では，この準備コースに関してゆるやかな枠組みを決めているだけなので（ドイツ語，数学，外国語を行うことという規定のみ），準備コースの内容は各諸州でかなり違っている(9)。

シュレスウィヒ・ホルシュタイン州では，必修科目が多く，入学者はドイツ語，英語，歴史，地理学，数学，物理学，化学ないしは生物学，フランス語ないしはラテン語を履修しなくてはならない。これに比べ，ヘッセン州では，ドイツ語，数学，外国語，第二外国語が必修であるが，その他に各夜間ギムナジウムが自由にその内容を決めることができる「入門授業」が用意されている（1981年の夜間ギムナジウムに関する条例による)。入門授業の目的は，入学者の学力や問題関心のばらつきを短期間で均一化するとともに，学校制度から遠ざかっていた入学者の知的探求心を高めることにある。同様の科目は，バーデン・ビュルテンベルク州でも設定されており（1984年の規定)，入学者には４コマの入門講座が用意されている。両州では，特に理科系の科目に関する入門授業の充実を図っている。

準備コースの学習内容をさらに大幅に各夜間ギムナジウムに委任しているのが，ノルトライン・ヴェストファーレン州である。1982年に決められたカリキュラム規定で

は，準備コースにおいてドイツ語，数学，外国語を必修としてるが，その他のカリキュラム決定権は各夜間ギムナジウムに委されている。ただ，2時間の自然科学科目と4時間の第2外国語を開設している夜間ギムナジウムが大勢を占めている。

準備コースを履修し，入門段階を乗り越えると，いよいよ2年間のコース段階に入ることになる。コース段階で基礎コースと重点コースを履修することは，一般のギムナジウムと同じだが，コース段階の成績評価の方法も一般のギムナジウムの規定に準じている。グレーベに従ってその規定方法を以下まとめて見よう(10)。

コース段階の修了が，アビトゥーア資格取得を意味することは言うまでもないが，そのためには，次の三つの段階を修了しなければならない。すなわち，それは基礎コースの修了資格，重点コースの修了資格，そしてアビトゥーア試験の合格証である。三つの段階の得点はそれぞれ300点満点（それぞれ評点基準の最高は15点，最低は0点），計900点満点でアビトゥーア資格取得の合否がでるのである。その内訳を示すと次のようになる。

まず基礎コースであるが，一般のギムナジウムの場合20コースを評点基準で単純計算するため，最高点は20〈コース〉×15〈評定基準〉＝300点となる。しかしながらすでに指摘したように夜間ギムナジウムの場合，時間的制約があり10の基礎コースしか開設できない。そのため，常設文部大臣会議では特別の規定を制定し，10の基礎コースにおける評点を2倍に換算して300点満点で評価しているのである。

重点コースとアビトゥーア試験の評価方法は，一般のギムナジウムとほぼ一致する。重点コースでは，学習者は三つの課題領域（「言語的文芸的芸術的課題領域」，「社会科学的課題領域」，「数学的自然科学的技術的課題領域」）を選び，3～5ゼメスター受講する6つのコースと，6ゼメスター受講する2コースがある。したがって次のような算定方式になっているのである。（6〈コース〉×45〈つまり3領域×15点〉）＋（2〈コース〉×15点）＝300点満点。アビトゥーア試験の成績は，4つの試験科目の評点（15点）と，最終ゼメスターのコースの成績をそれぞれ4倍して合計を出すのである。すなわち，（4科目×15点）×4＝240点と（1科目×15点）×4＝60点とを合算して300点満点となる。

ところで，アビトゥーア資格を取得するためには当然のことながら，コース段階の修了が前提条件となる。しかしながら，受講生の中には，職場や家庭の問題やその他の理由から夜間ギムナジウムを卒業できずに中退する者もいる。このような場合にも，修得した単位数が満たされており，それに相応しい能力が確認されたならば，「中等教育資格（mittlere Reife，いわゆる実科学校修了資格）さらには専門上級学校修了資格（Fachoberschulreife），専門単科大学入学資格（Fachhochschulreife）を授与

する必要がある。」このような提言を常設文部大会議は，以前より出していた[12]。

この提言は各州で討議され，その結果ベルリン，ブレーメン，ヘッセン，ニーダーザクセンそしてノルトライン・ヴェストファーレンの各州では，実科学校修了資格と同等の修了書を授与することになった。専門単科大学入学資格の授与は1983年11月以降，バーデンビュルテンベルク，バイエルン，ベルリン以外を除く全ての州で授与されることになっている[13]。

ノルトライン・ヴェストファーレン州の場合，生徒の能力に応じてさらに基幹学校(Hauptschule) の修了資格も授与している[14]。生徒は，夜間ギムナジウムの準備コース修了に際して基幹学校修了資格を取得することができるのである。専門単科大学入学資格に関しては，コース段階の所定の科目を２ないし３ゼメスター修了すれば取得することができる。さらに同州では生徒の希望があれば，個々の科目の修了証も授与するシステムがある。これらのシステムは，仕事上の理由から外国語や自然科学系の科目をさらに継続して学習したい受講生には好評であるという。中でもドイツ語科目は，東欧からの引揚者や外国人の利用が多いと言うことである。これらのいわゆる「一科目受講者」は，教育課程修了後の試験を受け修了証を受け取るのである。

以上，主に夜間ギムナジウムのカリキュラム改革の概要を見てきたが，こうした改革に伴って夜間ギムナジウムの社会的意味や役割も大きく変容していくことになる。特に1970年代中葉以降の高等教育の大衆化現象は夜間ギムナジウムに大きな影響を与えた。その変容の実態に関する若干の考察を進めてみたい。

4．夜間ギムナジウムの変容とその実態

最も大きな変容の一つは，夜間ギムナジウム及びコレークの受講生が大幅に増加したことであろう。以下の表Ｉは，1965年から1989年までの学校種別に見た生徒数の変遷である[15]。

次頁の表Ｉから理解できるように，夜間ギムナジウム及びコレークの生徒数は，１万人程度であった60年代に比べ，70年代中葉以降は２倍から３倍に近づいていることが分かる。

こうした受講生の増加とそれに伴う施設の量的拡大は，夜間ギムナジウム及びコレークと一般のギムナジウムとの「同質化」傾向を生み出すことになった。当初この様な傾向に対しては，批判的な見方が多かったと言われている。何故なら従来夜間ギムナジウムやコレークは，一般のギムナジウムとは違って職務経験のある学習者による独自な教育活動が可能となる施設であり，職業教養と一般教養の結合による特色あ

表 I　学校種別の生徒数の推移（単位：千人）

年	基礎学校	基幹学校	実科中学校	ギムナジウム Sek. I	ギムナジウム Sek. II	夜間ギムナジウム及びコレーク
1965	3453.2	2112.5	570.9	760.7	197.2	10.7
1970	3972.5	2374.9	863.5	1062.1	317.4	15.4
1975	3914.7	2510.4	1179.9	1394.5	469.0	23.3
1980	2772.8	1933.7	1351.1	1495.5	623.5	26.3
1982	2439.4	1748.0	1278.1	1378.3	672.1	27.9
1983	2350.9	1611.7	1214.4	1289.1	671.7	27.7
1985	2254.6	1332.5	1049.0	1110.2	640.1	28.0
1987★	2282.7	1146.3	902.3	978.6	570.4	29.2
1988★	2311.5	1087.2	851.7	937.2	528.0	29.0
1989★	2334.8	1051.8	824.2	917.4	483.1	28.8

★の年は，見込み数（常設文部大臣会議による算定；Dokumentation Nr. 99）
資料：BMBW：Grund-und Strukturdaten 1987/88, Bonn, S. 34f.
U. BMBW：Grund-und Strukturdaten 1988/89, Bonn, S. 34f.

る教育活動が行われるところに意義があると見なされていたからである。「同質化」傾向は，このような夜間ギムナジウム及びコレークを第一の教育への道の「補完施設」化するものであるというわけである。

しかしながら，70年代以降の受講生の「職業観」の大幅な変容はこのような見解に修正をせまるものとなった。ユッテマンによれば，入学後多くの受講生がこれまでの自分の職業と距離をおく傾向が強いと言う(16)。というのも彼らの多くは，自らの職業を偶然かあるいは暫定的に決めてきたにすぎないため，これまでの職業選択に関する不満が自らの職業教養への無関心を生んでいるという。これはドイツの労働界の主要な職業形態が，古典的な天職としてのイメージが強い「Beruf 的職業」からパートタイム的な「Job 的職業」へ変容したこともその要因の一つにあげられよう。いずれにしても受講生の「職業観」のこのような変容は，夜間ギムナジウム及びコレークの社会的意味や役割，その存在意義の根本的な再考を求めていることは間違いないであろう。

受講生増加に伴うさらに看過しえない事実は，女性の受講者の動向である(17)。これまで第二の教育への道(18) の諸施設において女性受講者の割合は概して少なく，1960年代の平均でも25%を越えることはなかったが，1970年代末には60～70%を占める施設も現れることになった(19)。他の先進諸国と同様に，ドイツにおいても1960年代から1970年代の初めまで高等教育への門戸は閉ざされていたと言われている。この時期多くの女性が中等教育資格を取得しただけで学業生活を終えてしまうことが多かったと言う。その背景には，戦前から脈々と受け継がれてきた典型的な「保守的女性観」の存在を無視できない(20)。

「女性は生まれつき，受動的であり，合理的，実用的，具体的であろうとするよりも情緒的である」，「女性は，抽象的なことや客観的なことが苦手である」，「女性には，創造的能力が欠落しているばかりか，技術的能力や政治的理解力もない」等々。それ故に，女性に高等教育は必要ない。このような偏見や女性蔑視の払拭に貢献したのがドイツにおいても1970年代初頭から始まった大規模な「女性解放運動Frauen-Emanzipationsbewegung」であった。そして，この種の運動では，先のイデオロギー的女性観の虚偽性暴露と共に，とりわけ女性の教学意欲の高揚が叫ばれたと言われている。

その際，職業を持つ女性でも通学可能である第二の教育への道の諸教育施設は，極めて重要な役割を果たしたのである。カジェンスとフレスナーの研究によれば，この時期多くの施設においては，女性達の間により高度な職業資格取得を目指す強い勉学意欲の現れや，女性としての品位の向上を図る諸活動，さらに伝統的な従属関係の打破をテーマとした数々の討論会が見られたという[21]。

ところで，夜間ギムナジウム及びコレークの受講者数の増加は，当然のことながらアビトゥーア取得者数の増大にも結びついていったことは言うまでもない。1960年当時，夜間ギムナジウムで約800人，コレークで110人の910人程度だったアビトゥーア取得者数は[22]，1970年代に入って急増し，表Ⅱにも見られるように1983年には6,687人にまで増大した[23]。

表Ⅱ　1970年から1985年までの第一と第二の教育への道の卒業生

年	一般大学入学資格を持つ第一と第二の教育への道の卒業生の総数	第二の教育への道の卒業生の数と割合（%）		第一の教育への道の卒業生の数と割合（%）	
1970	76,345	3,138	4.11	73,207	95.89
1971	85,009	3,424	4.03	81,585	95.97
1972	92,020	4,007	4.35	88,013	95.65
1973	99,556	4,297	4.32	95,259	95.68
1974	111,281	4,945	4.44	106,336	95.56
1975	114,262	5,338	4.67	108,924	95.33
1976	130,504	5,544	4.25	124,960	95.75
1977	144,130	5,672	3.94	138,458	96.06
1978	154,217	5,476	3.55	148,741	96.45
1979	127,085	5,692	4.78	121,393	95.22
1980	151,425	5,654	3.73	145,771	96.27
1981	176,638	5,160	2.92	171,478	97.08
1982	192,005	6,382	3.32	185,632	96.68
1983	202,489	6,687	3.30	195,802	96.70
1984	203,936	5,508	2.70	198,428	97.30
1985	203,891	5,914	2.90	197,977	97.10

資料：この表は，ヴィーズバーデン連邦統計局のデータに基づき，S．ユッテマンが作成（Fachserie 11, Bildung und Kultur, Reihe 1, Allgemeines Schulwesen der Jahre 1971-86.）。

しかし表Ⅱの統計において注意しなければならいないことは，第一と第二の教育への道の卒業生の割合である。卒業生，すなわちアビトゥーア取得者数の総数は確かに増大しているが，両者を比較すると第二の教育への道の卒業生の割合は1970年代末以降むしろ減少しているのである。1970年4.11%であった第二の教育への道の卒業生は，1985年には2.90%にまで落ち込んでいる。一般ギムナジウムとの「同質化」の問題でも触れたように，数字的な面では第二の教育への道が，アビトゥーア取得資格に関しては，第一の教育への道の補完施設的な役割を果たしているにすぎないとの指摘もある(24)。

5. おわりに

ドイツにおいて一度職業についた者，すなわち社会人に対して上級の教育へ道を開く制度「第二の教育への道」は，1970年代以降の量的拡大により着実に一般に定着し，身近なものになっていると言われる。特に，女性に対して高等教育への門戸を開く役割を果たした点は評価しなくてはなるまい。

他方で夜間ギムナジウムやコレークは，アビトゥーア取得資格に対する第一の教育への道の補完施設との見方もあるが，中退者の中に相当数いると思われる各種資格取得者（中等教育資格，専門上級学校修了資格，専門単科大学入学資格等々）の存在を見れば，継続教育機関としての「生涯教育施設」的な社会的役割を評価すべきであろう。

以上本稿では1970年代から始まった第二の教育への道の教育施設における諸々の改革とその実態について考察してきたが，統一後の状況（特に旧東ドイツに含まれていた州）には詳しく触れることができなかった。「生涯教育施設」としての夜間ギムナジウムやコレークが，これからどの様な社会的役割を果たしていくのかを含めて今後の課題としたいと思う。

註

（1）「ドイツにおける生涯教育施設の史的変遷に関する研究（その1）——夜間ギムナジウムを中心に——」『九州産業大学教養部紀要』第29巻第4号，平成3年。

（2）本稿においても統一前の時期においては主に旧西ドイツ（ドイツ連邦共和国）をさすものとして使用する。

（3）ドイツにおける大学進学者の数は，1970年代の中葉以降急激に増加し，1990年代に入って深刻な問題になっている。大学問題は，マスコミでも好んで取り上げられている。特に大学進学希望者の数に入学

定員が追いついていないことが大きな問題となっている。1975年では66万9800人の定員のところ81万5,445人の大学進学者であったのが，1994年には98万6,820人の大学入学定員のところに178万3,697人の学生が学んでおり，マスプロ教育の弊害が指摘されている（Bildungsfalle： Universität In： *Focus, Nr. 13 25. März 1996, S. 129～134*)。近年の大学教育の構造的問題を取り上げたものとしては以下の本がある。P. Glotz, Im Kern verrottet？Fünf vor zwölf an Deutschlands Universitäten, Stuttgart, 1996.

（４） ギムナジウム上級段階の改革に関する詳細な研究としては以下のものがあげられる。今井重孝『中等教育改革研究――ドイツギムナジウム上級段階改革の事例――』風間書房，平成５年。

（５） 前掲書，143～146頁。

（６） H. Graebe, Das Abendgymnasium, S. 95. In： *Zusammengestellt von G. Kühnhold, Der nachgeholte Schulabschluß. Beiträge zur Situation des Zweiten Bildungsweges, Bad Honnef, 1985.*

（７） 小川，前掲論文11頁。

（８） H. Graebe, 1985, a.a.O., S. 96.

（９） Ibid., S. 97.

(10) Ibid., S. 98～99.

(11) 今井，前掲書147頁。

(12) ～ (14) H. Graebe, 1985, a.a.O., S. 101.

(15) S. Jüttemann, Die gegenwärtige Bedeutung des Zweiten Bildungsweges vor dem Hintergrund seiner Geschichte, Weinheim, 1991, S. 78.

(16) この様な傾向は，すでに1960年代末から見られることが指摘されている（Ibid., S. 81～82.)。

(17) R. Huchthausen, Absolventen des Zweiten Bildungsweges an der Universität, Frankfurt (Main), 1982, S. 118～120.

(18) 拙論でも指摘したが（12頁)，ドイツにおいては一般のギムナジウムから大学へ進学する伝統的なコースを「第一の教育への道」(Erster Bildungsweg）と呼び，夜間ギムナジウムやコレーク等の中等教育機関を経由して大学へ進学するコースを「第二の教育への道」(Zweiter Bildungsweg）と呼ぶ。

(19) 1980年代初頭は平均して50％程度である（Jüttemann, 1991, a.a.O., S. 93～94)。

(20) Ibid., S. 95～96.

(21) R. Casjens & H. Flesner：Frauen auf dem zweiten Bildungsweg. *In：Die Deutsche Schule, 1, 1980, S. 26～27.*

(22) Jüttemann, 1991, a.a.O., S. 78.

(23) Ibid., S. 93.

(24) Ibid., S. 92～93.

Zusammenfassung

Seit dem Beginn der siebziger Jahre erfolgte ein zügiger Ausbau von Zweiter Bildungsweg-Institutionen. Damit einhergehend kam es zu einem erheblichen Anstieg der Teilnehmerzahlen. Dieser Aufsatz versucht, die Fragen um die Reform des Lehrplans in Abendgymnasien nach den siebziger Jahren zu beleuchten.

Der Inhalt des Aufsatzes werden wie fogt entwickelt.

1970 wurde die Konferenz der Kultusminister (KMK) über Abendgymnasien im Sinn des nordrhein-westfälischen Vorgehens geändert, so daß auch alle deutschen Abendgymnasien die Wahlpflichtfächer (wie die gymnasialen Oberstufen) einführen konnten. Aber erst 1979 kam es in der KMK zu der "Vereinbarung über die Neugestaltung der Abendgymnasien", durch die im wesentlichen das System der neuen gymnasialen Oberstufe auf die Abendgymnasien übertragen wurde. Kernstück der Reform war der Grund-und Leistungskurse, dessen Ziel eine stärkere Individualisierung des Schullaufbahn des einzelnen Schülers war.

Seit dem Beginn der Reform sind viele Einzelheiten geändert worden. Die Diskussion um die Reform ist auch heute noch keineswegs abgeschlossen.